

愛知県環境審議会水質・地盤環境部会（2025 年度第 2 回）会議録

1 日時

令和 7 年 9 月 16 日（火）午前 10 時から午前 11 時 20 分まで

2 場所

愛知県庁本庁舎 2 階 講堂

3 出席者

（1）委員、専門委員、特別委員

【対面出席】

井上部会長

【オンライン出席】

浅川委員、神谷委員、武田委員、田中委員、南委員、神本専門委員、田代専門委員、廣岡専門委員、宮崎専門委員、秋葉専門委員（代理：東海農政局農村振興部農村環境課長）、山田専門委員（代理：中部経済産業局資源エネルギー環境部環境・資源循環経済課長）、森本特別委員（代理：中部地方整備局企画部環境調整官）、澤井特別委員（代理：第四管区海上保安本部警備救難部環境防災課長）、松下特別委員（代理：中部地方環境事務所環境対策課長）

（以上 15 名）

（2）事務局

【対面出席】

（愛知県環境局）平野技監、杉本環境政策部長

（水大気環境課）戸田課長、鈴木担当課長、小塚課長補佐、木佐主査、小島主査、深見技師

（環境調査センター）内藤水環境部長

（水産課）下山担当課長、日比野課長補佐、柴田課長補佐

【オンライン出席】

（水産試験場）谷川漁場環境研究部長、堀木総括研究員、竹内漁業生産研究所長

（以上 15 名）

4 傍聴人等

傍聴人 2 名

報道関係者 なし

5 議事

- ・会議録の署名について、井上部会長が浅川委員と武田委員を指名した。

（1）審議事項

ア 底層溶存酸素量に係る水質環境基準の水域類型の指定について

- ・資料 1～2 について、事務局から説明があった。

<質疑応答>

【井上部会長】

底層溶存酸素量の環境基準値は、日間平均値であるが、環境基準点の候補地点での試験測定では1日の間、連続して測定を行い、平均値とするのか。それとも1回のみ測定を行うのか。

【事務局】

1日の間で1回のみ測定する。底層溶存酸素量の測定に割けるリソースも限られているため、国の答申において、最低限求められている月1回、年12回の測定を行い、底層溶存酸素量の状況を把握していく。

【井上部会長】

底層溶存酸素量の評価は、年間12回測定した結果の平均値で評価するのか。

【事務局】

連続測定を実施しない場合は、日間平均値の年間最低値により評価する。

【浅川委員】

国の答申において、類型指定後、保全対象種の生息状況の健全性についても可能な限り把握するとされているが、三河湾における予定を伺いたい。

【事務局】

現在、国により、東京湾及び伊勢湾において、どのように保全対象種の生息状況の健全性を把握していくかも含めて、達成期間及び達成率の検討が行われている。引き続き、国による検討方法について情報収集を行い、三河湾における検討において反映させていく。

【井上部会長】

今の部会報告（案）について、修正に関する御意見があればお願いします。

（発言なし）

特に異議が無いようなので、この案を部会報告としてとりまとめ、環境審議会に報告する。

イ 生活環境の保全に関する水質環境基準の水域類型の指定の見直しについて

・資料3～5について、事務局から説明があった。

<質疑応答>

【田代専門委員】

資料のデータについて、2023年までのものが多いが、パブリック・コメント時には、2024年のデータを追加することは可能か。可能な限り最近の傾向もわかるとよい。

【事務局】

例えば、水域別の濃度については、現状でも2024年度の結果まで掲載している。汚濁負荷量は2023

年度までのデータとなっているが、取りまとめが年度末になるため、更新は難しいと考えている。
その他のデータについては、可能な限り最新のデータに更新させていただく。

【田代専門委員】

特に漁獲量等については、一般の方が見ても身近に感じられる内容と思われるので、間に合うのであれば、最新のデータを追加いただくとよい。

【宮崎専門委員】

社会実験では、矢作川浄化センター及び豊川浄化センターで増加運転をしているが、ノリ・アサリの漁場を見ると矢作川河口や湾口での生産性が高くなっている。今後、渥美半島でも増加運転を実施していくのか。

【事務局】

資料5のP3に記載のとおり、現在も田原市独自の取組として、渥美浄化センターにおいて総量規制基準値の範囲内で増加運転が実施されている。

【宮崎専門委員】

現状で、季節変化に合わせて増加運転を行っているとのことだが、具体的にはノリの生産性を上げるため、種付けする時期に合わせて増加放流し、夏場は減らすといった対応をしているのか。

【事務局】

御指摘のとおり、現在の社会実験では、ノリへの効果を期待し、養殖期間である9月から3月までに限った季節別の増加運転を実施している。

継続中の社会実験の間は、同様の期間で実施するものと考えているが、これまでの社会実験の結果等から、アサリやその他の生物について、春から夏も含めた栄養塩類の重要性が指摘されているところであり、今回の類型指定の見直しについては、季節別ではなく通年でⅢ類型へ見直すことが適当と考えている。

【井上部会長】

資料5についてもパブリック・コメントの資料として、添付するのか。

【事務局】

資料5そのものを添付することは想定していないが、必要な情報は資料編に盛り込む等、今後、パブリック・コメント案をまとめる際に検討していきたい。

【井上部会長】

資料5のP3のうち、「①三河湾における栄養塩増加試験運転」と「③伊勢湾（愛知県）におけるりん濃度増加管理運転」では、①には浄化センター名が記載されておらず、書きぶりが異なるので、同様な書き方に統一しておいた方がよい。

【事務局】

書き方を統一する。

【井上部会長】

確認の意味で、本件についての考え方を整理しておく。国が類型指定等の考え方を見直したため、それに従って県が三河湾の見直しを行うもので、国の考え方は資料4のP4のとおりである。

まず、「②「利用目的の適応性」に係る水浴の見直し」として、利用目的の適応性から水浴が削除された。ただし、水浴について何もしなくてよいという訳ではなく、大腸菌数によって管理することである。全窒素及び全りんは水浴の管理の対象から外すもので、この見直しが今回の類型指定の見直しに大きく関わっている。

水浴が削除されると、利用目的の適応性は基本的に水産利用だけとなるが、水産側のニーズとして、水産1種ではなく、水産2種及びそれ以下の水産利用が求められているので、Ⅲ類型が望ましいという説明だった。また、「③季別の類型指定の設定」も可能となっているが、三河湾では必要ないということである。

さらに、「④CODの達成評価の変更」については、海域のA類型とB類型では必ずしも評価を行わなくてよいということで、伊勢湾に関しては、国において評価を行わない方向性で検討が進められており、今後、三河湾の方でも同様の検討を進めていくということだった。

今後、栄養塩あるいはCODに関して、この部会で審議することが増えてくるかと思う。昨年度は社会実験の継続に係る総量規制基準の見直しについて承認をいただいたが、今回は、三河湾の全窒素・全りんの類型指定の見直しについて審議している段階である。

一通り意見も出尽くしたようであるため、事務局においては、本日の意見を踏まえ検討を進めていきたい。

(2) その他

なし

以上